

## 池上良正『死者の救済史 — 供養と憑依の宗教学』

角川書店, 2003年7月, 266頁, 1600円

小川 有閑

ここ数年、日本産ホラー映画のヒットが続き、テレビでは相変わらず心霊番組が放送されている。一方、大ヒットした『もののけ姫』は<人間>対<自然の靈威>という構図をもっていた。このような現象の背景には、日本人が死者の靈や自然の靈威（神々）の存在を心のどこかで信じているということが考えられよう。また、仏教が葬祭仏教として批判されるようになって久しいが、仏教が葬祭仏教となっていく背景には、死者の靈を供養せずにはいられないという心理が働いていると考えることができる。現在でも日本人の多くが、死者や自然の靈の存在を明確にはないにせよ、信じている。それは、意識調査などからも推察できるし、自分個人の感覚としても、曖昧ではあるが心のどこかでその存在を認めていることは否定できない。

日本人が死者や自然の靈との関係性を意識する、その歴史的展開はいつから、どのように発展してきたのだろうか。仏教という普遍的宗教が流入した日本であるが、個別の靈的存在との直接交渉は全否定されることなく、むしろ強化・洗練されていった。

本書は、そのような生者と靈との交流の歴史を「死者の救済史」で捉え、そこから仏教が民衆宗教として定着する過程を探ろうとする。著者は死者の救済方法を2つのシステムに分類し、その両システムが併存、発展した歴史的展開を描き、そこに見える「供養」と「憑依」をキーワードに考察を展開する。

本書の構成は以下の通りである。

- 第一章 苦しむ死者と日本の民衆宗教
- 第二章 仏教説話集に見る死者の救済
- 第三章 供養システムの深化と定着
- 第四章 比較死者供養論にむけて
- 第五章 憑依再考
- 第六章 仏僧と憑依
- 第七章 憑依から供養へ

第一章では、日本人が死者をどのようにイメージしてきたのか、そして民衆宗教は死者にどのように対応してきたのかを概観する。ここで述べられることが、本書の基本的な思考の枠組みとなる。日本の民衆宗教史の中で注目すべきは、生きている人間と個別的死者との直接的交流・交渉である。とくに「苦しむ死者」「浮べれない死者」との交流である。普遍的救済論であるはずの仏教流入にもかかわらず、その交渉・交流は根強く残り、いや、むしろ強化されたと言っている。

そもそも、日本人の他界観とはいかなるものか。著者は本質主義的な一義的答えの危険性を意

識した上で、出来る限りの言語化をおこない、二つのイメージを想定する。

一つは「安らかな死者イメージ」、もう一つは「浮ばれない死者イメージ」である。「浮ばれない死者」を「安らかな死者」に変えること。民衆宗教に期待された最大の課題は、まさにこの点にあった。仏教もこの課題の対処法として歓迎された。その課題に対して、仏教の「輪廻転生」「追善廻向（供養）」の教義が役立ったとされる。とくに「追善廻向」は、生者と死者の個別取引を温存させた。

著者は「浮ばれない死者への対処法」の展開過程を考察するうえで、〇〇教・〇〇信仰といったような一つの完結した実体あるものを想定することを回避し、現実問題を具体的に処理する思考・行動様式のシステムを想定する。システムは以下の二つに分けられる。

第一のシステムは<崇り一祀り/穢れ一祓い>システムである。<崇り一祀り>とは、「自分たちよりも強いと判断された死者を崇る靈威（神）として祀る。懐柔策」であり、<穢れ一祓い>とは、「自分たちよりも弱いと判断された死者を穢れた靈威として祓う。排除策」である。このシステムにおいては、相手が「崇る」存在であるか、「穢れた」存在であるかはその場ごとの状況判断にゆだねられる。普遍主義的価値基準ではなく、その場の状況により自分達より優位なものと判断すれば祀り、劣位であれば祓い捨てるのである。著者は「場の力関係に応じた『個別取引』のシステム」と評する。そして、このシステムは地縁・血縁などの共同体を基盤とするものであり、崇る靈威に対しての「祀り」の効力は集団が大きいほど、効力も大きいとされる。

第二のシステムは<供養/調伏>システムである。<供養>は理想的には「仏教的功德を死者に廻施して、救済を援護」し、現実には「死者への直接対応も可能」なシステムであり、<調伏>は理想的には「仏法の力によって死者を善導・教化して鎮め」、現実的には「厄介な死者の撃退・排除」のシステムである。<供養/調伏>システムは、仏教インパクト以降に仏教の教義を基礎としながら発展した。<供養/調伏>システムは、在来の<崇り一祀り/穢れ一祓い>システムを正面から否定せず、巧みに接合して成長した。図式的には、<崇り一祀り>には<供養>、<穢れ一祓い>には<調伏>を被せることができる。

これらのシステムはともに融通無碍の柔軟性をもっており、「祀りつつ祓う」「祓いつつ祀る」、「供養しつつ調伏する」「調伏しつつ供養する」という臨機応変にうつつかえることができるシステムであった。

二つのシステムの共存は仏教独特である。キリスト教、イスラム教では流入以前にその地域にあった<崇り一祀り/穢れ一祓い>システムに似たものは破壊、もしくは変容を余儀なくされた。他の仏教国と比べて顕著な日本の葬祭仏教形成は、仏教が「苦しむ死者」への対処という課題に見事に応えたということのあらわれであろう。そこには、世界宗教がいかに地域に定着していくかという研究に示唆を与えるものがあると著者は述べる。

第二章および第三章では、第一章で述べられた二つのシステムの競合と並存、そして発展の過程を具体的に探る。第二章では、平安末期から鎌倉時代にかけての仏教民衆化、つまり<供養/調伏>システムの萌芽の過程を仏教説話集から考察する。

難解な思想体系の仏教が、現実に民衆にいかにかれ浸透していったのか。それを知るためには仏教説話集が恰好の資料となる。『日本靈異記』、『法華験記』などを取り上げ、在来の<崇り一祀り/穢れ一祓い>システムの上に<供養/調伏>システムが民衆に浸透していく様を見る。

説話集の中で、人間や動物の怨念は仏教の普遍的教義の中にとりこまれ、彼らは生者の慈悲を待ち望む弱い存在へと変質している。説話集の考察から、筆者は三つの命題を読みとる。

第一は、それまで個別的関係の歪みとして捉えられてきた死者の怨念が、因果応報や追善廻向などの仏教の普遍主義的原理に回収されること。第二は、在来の「祀り」のように集団の権威に依拠していたものから、読経・念仏・写経など個人的積徳行為である「供養」の道が開かれること。また第三は、生者と死者との「個別取引」における主導権が、死者の側から生者の側に引き寄せられていくことである。

第一命題のように、〈崇り—祀り〉の基盤である個別的怨念が仏教教義に回収されるにも関わらず、第二命題に示したように、個別取引である〈供養〉が浸透していくという逆説は両システムの共存を意味する。

そして、第三の命題に著者は注目する。主導権の生者側への移行は、「強い」人格の誕生でもある。これにより、死者だけでなく自然に対しても、人間は主導権を握れるようになる。ウェーバーは「脱呪術化」を近代化の要因としたが、日本の近代化は霊的存在への対処法の工夫であり、〈供養〉の浸透は近代の経済大国を生み出す地ならしの一步であったといえるのではないかと考察する。

第三章では、第二章で扱った時代からさらに針を進める。まだ旧システムに間借り状態であった〈供養／調伏〉システムは、仏教のさらなる民衆化により、独立したシステムとして確固たるものとなっていく。武将の時代になっていくと、勝利した武将は、敗北し怨みを持っているはずの死者に対して〈供養〉システムを利用し、上位にたつことができるようになった。このような死者を恐れない「強い」武将の誕生は、仏教民衆化、すなわち仏教葬祭化と軌を一にするものであった。

武将のような為政者、社会的エリートが〈供養〉システムによって死者の崇りから解放されていく一方で、一般民衆には死者の情念の力は依然、強く残っていた。近世には〈崇り—祀り〉〈供養〉システムを筋とした仮名本、歌舞伎、落語などが流行した。近世町民の想像力の中で、死者の情念との個別取引は一層の輝きを放っていたといえる。そして、この二つのシステムは、戦死者の追悼・慰霊はもとより、新宗教活動、怪奇・心霊物語やテレビ番組など、近現代にいたるまで様々な現象として再生産されていると結論する。

第四章では、イスラム教、キリスト教における死者への対処法例をいくつか挙げ、世界宗教が土着化する上で、在来の死者との交流の習俗とどう関わってきたのかを考察し、比較死者供養論の可能性を示そうとする。ことにキリスト教が民衆層に浸透するにあたり、教義とは矛盾しかねない煉獄思想が現実の需要にこたえる方策であったとして、仏教の日本での民衆化に類似する点を明らかにする。世界宗教が各地の民衆に浸透する際に、いかに民衆の不安や負い目に対処してきたのか、逆にそうした不安を増幅させてきたのかという視座が、比較研究の新たな展開を導くとする。

第五章からは「憑依」についての考察が中心となる。第五章では、「憑依」という語を洗い直し、今後の宗教研究における有用性を問い直す。「憑依」はシャーマニズム的であり、高僧や預言者が「示現を得る」「幻を見る」などは「神秘体験」として、「憑依」とは異質な、より高次元な宗教体験とみなされてきた。

しかし、その違いがどれほどのものであるかは、実際には判定できないのである。文字テキストにはそれを記録する者の解釈や意図が存在し、「憑依」の解釈や意味づけの葛藤や緊張があるこ

とに、研究者は常に注意を払わなければならない。

著者は、そのことを踏まえた上で「憑依」の仮説的定義を立て、制度的宗教者の高尚な体験と、単なる巫覡の憑依という二分法から脱しようとする。その定義とは、「ある主体（一般には人間だが、祭具・動植物・器物・土地建物などの場合もある）が、他の神的ないし靈的存在（神・仏・聖霊・精霊・死霊・祖霊・動物霊・邪霊・他人の怨霊など）から、即時的、直接的、かつ不可抗的な拘束性をともなう影響力（善悪を問わない）を受けていると、複数の人間によって認定された現象の総称」というものである。

この定義をもとに中世の説話集を読むと、「憑依」が豊かな内容を持っていることが分かる。「つく」者も「つかれる」者も巫覡的な人物とは限らず、一般民衆から仏教僧侶にも存在し、「憑依」は「当時の仏教文化全体を覆い尽くしていた」とまで言う。そして、このことは仏教が民衆化の過程で個別的靈的存在の意向を普遍的原理で切り捨てずに、個別的対応を懇切丁寧に示すものであるとする。

再定義された「憑依」による考察を受けて、著者は、「憑依」のように「歴史的痕跡を負った定義そのものが、ある重要な部分を覆い隠してきたのだということ、しかもその隠された部分こそが、今後の宗教研究において明みに引き出さなくてはならない必須の部分である」と強調する。そして最後に、何を「憑依」とし、何を「憑依」としないかという葛藤や緊張を見つめることで、その宗教的意味世界の形成のダイナミックな様相をとらえることができるとして、「憑依」という学術用語の有用性を提示する。

第六章では、説話集をもとに、前章よりさらに深く仏教的世界に広がる「憑依」について考察する。そこでは、一般民衆と深く接触した中下級の仏教布教者たちの活動においては、「仏者的世界」と「巫者的世界」が建前ほど分離しておらず、むしろ融合していた実態が浮かび上がる。そして巫者的な人々も（総論としては仏教世界への従属という流れは否定できないが）、その特殊な能力を期待され、民衆層への仏教布教の最前線で主体的な役割を果たした場合もあった。著書は「日本仏教の民衆伝道の現場では、『憑依』の宗教形態が、きわめて中心的な役割を果たしていた」とまとめる。

第七章では、沖縄のユタ、キリスト教の聖霊運動、行者仏教などの例を挙げ、現代の「憑依」そして「供養」を考察する。きわめて個別的な霊との直接交流である「憑依」は、死者との個別的取引である「供養」と密接に絡み合ってきた。浮べれない死者は生者に「崇り」、「祀り」や「供養」を要求した。その要求は巫者的宗教者を媒介として（「憑依」して）訴えるものであった。「崇り」「供養」「憑依」が、ひとつながりの構造の内であったといえる。〈崇り—祀り〉を温存し、その上に〈供養〉が発展してきた日本の民衆宗教では、「憑依」もまた温存されているとする。そして、著者は「崇り」、「供養」、「憑依」など死者と生者の個別的関係には、豊かな人間性を育む意義が見出せることを示し、最後に次のように結ぶ。「『憑依』から『供養』に抜ける孤独の小道は、人がこの世ならざる者たちと響き合う、喜びと哀しみに満ちた場所であった。」

本書は全体を通して、新たな宗教民俗学、そして新たな比較宗教学の構築への意気込みに溢れている。それは、近代の宗教学に対する深い反省から出発している。著者はまえがきで「シャーマニズム」、「祖先崇拜」といった従来、民俗・民衆宗教史のキーワードであった用語の問題点を指摘する。この用語はどちらもキリスト教文化を背景とした土壌で、異教世界を説明するモデルと

して鑄造されたものである。これらの用語が無批判に使用されると、多彩な現実が無理やり西欧的視座や価値観によって切り取られてしまいかねない。同様の問題意識は随所に読みとることができる。

著者は、柳田国男や梅原猛の「日本人の他界観」論を挙げて、ある社会集団の冥界の地理学を一義的で矛盾のない定式として描き出してしまうことを近代人の幻想であると批判する。また、一般生活者の現実的な死者への対処法を論じるにあたって、完結した実体として特定の「宗教」や「信仰」という実体論・本質論的用語を使用することには無理が生じるとする。このような近代的思考の問題点に対して、著者は新たな視座を作り出すことで乗り越えようとする。それが、日本人の他界観を「安らかな死者イメージ」、「浮ばれない死者イメージ」で示すことであり、死者への対処法をく崇り一祀り／穢れ一祓い>システム、<供養／調伏>システムという思考・行動様式のシステムとして捉えることである。

近代の宗教学に対してはポストモダニズムの側から激しい批判が行なわれてきたが、著者もまた近代的な実体論・本質論に対して批判をする。しかし、批判だけではなく、問題点を真摯に反省し、上述のように新たな可能性を探ろうとする。その姿勢をもっとも感じさせるものは、「憑依」に関する考察である。学術用語自体が社会的文脈・歴史的な文脈の中である価値観を付与されてしまえば、その用語で現象を切り取ることは、ある面を明らかにする反面、ある面を隠してしまう危険性ははらむことになる。また、文字テキストを読む際には、そこに記録者の解釈が含まれていることに注意しなければならない。文字テキスト（記録されたモノ）とありのままの状況（記録されるモノ）は、同じモノとは言えない。宗教研究者には「文献上の語句の表記に幻惑されることのない読解の力」、「エリートの手によって記された個々の表記を実体論的・本質論的な現象記述として鵜呑みにするのではなく、むしろその表記をめぐって展開されたはずの、政治的・社会的主導権の争奪戦を見ぬく感性」が必要であると著者は言う。

当然ながら、著者は自身にもその課題を突きつける。この課題に対しての回答が、「憑依」再考に表れていると言えるのではないだろうか。

ただし、第一章から第三章までが、<崇り一祀り／穢れ一祓い>システムと<供養／調伏>システムの共存・発展過程を動態的に描き出していることに対して、第五章から第七章での「憑依」に関しての考察が「憑依」という用語を巡る政治学に力点が置かれていることには一冊の書物としての違和感が残る。確かに、両者ともに新鮮かつ有意義な考察であり、「崇り」と「祀り」・「供養」の間の媒介としての「憑依」という連関性も納得できる。しかし、二つの「死者への対処システム」の歴史的展開を「憑依」を含めて考察することができるのなら、連関性がより理解しやすいものとなるのではないだろうか。

また、第四章において、キリスト教とイスラム教の諸地域での実際の死者との関わり方を取り上げて日本との比較を行なっているが、他の仏教国との比較を行なうことも必要ではないだろうか。キリスト教地域においても、イスラム教地域においても、教義との矛盾をはらむような追善廻向的な観念や習俗を見出すことができ、世界宗教が民衆化する際の「死者への対処法の用意」という共通性を発見できる。では、日本以外の地域で、仏教はいかなる民衆化を遂げていったのだろうか。まして、本書では日本の特色を二つのシステムの共存や「憑依」などに求めてきた。そうであれば、他の仏教国での死者への対処法を取り出して、比較する必要があるように思える。その場

合、「追善廻向」的なものを見出す「類似」の比較研究も無論、重要ではあるが、日本の特異性を見出す「差異」の比較研究も非常に興味深いものとなるだろう。

本書は、現代に通じる日本人の死者との交流を生き生きと描き出すとともに、宗教学者を志すものにとって非常に示唆に富んだ、新たな宗教学の可能性を示す新鮮かつ刺激的な一冊である。